

# 草の芽句会だより

NO,120  
18,8、2

熊蟬を採る目的で帰省せし  
噴水のつくる細波返す風

文子

番碑の緑陰にあり城歩く  
城めぐり汗でびしょ濡れ句座に着く

貞子

大雨に崩れし城壁蟬しぐれ  
枳形の巨石にひびく蟬時雨

節子

走り藪かゆに仕立てる昼餉かな  
物忘れ増える日々なり茗荷の子

純子

搦手へ青ススキの歩となりぬ  
毎年に変わらぬ城の蟬しぐれ

範子

城山に近づく蟬の声激し  
足元に蟬の亡骸城の歌碑

禮子

病葉を浮かべて濠の水澱み  
城山の道岐れたる夏落葉

剋子

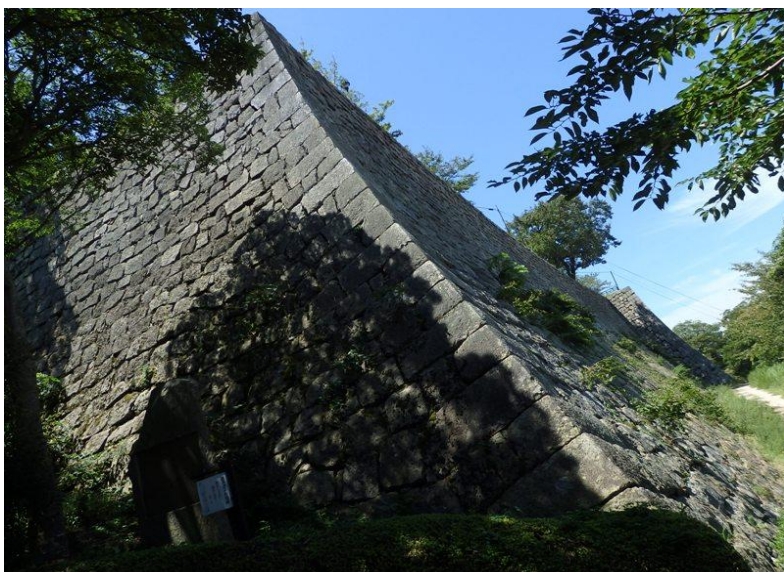
話したき事多くあり墓洗う  
御無沙汰を詫びて先祖の墓洗う

貞

台風の予報しきりや雲速し  
台風接近虫の動きのはげしさよ

芳子

出席者 大黒 川原 氏家 森 吉崎 馬場 小山  
投句者 真鍋 小林



城山は降るような蟬時雨である。耳を澄ませると夫々の蟬の声が、聞き分けられる気がする。どの声も今日を限りと鳴いているのだ。見返り坂のベンチ真向いには海が見える。キラキラ輝く眩しい真夏の海と青空。遠く水平線を眺めていると、どこからともなく湧きあがる歓声が聞こえてくるよう。もうすぐ甲子園が始まる。遠い昔、私達も高校生だった。スタンドで声を漕らして応援した日もあった。蟬時雨は忘れていた青春時代を想い出させてくれようとしている。来月はもう蝸の鳴く頃。後期高齢者の私達に、蝸は「頑張れ！」とエールを送ってくれるかもしれない。